



ふたはの桂

京都府大広報 **No.179** | 2017.3

KYOTO PREFECTURAL UNIVERSITY



特集 京都学・歴彩館が北山にオープン

CONTENTS

地域連携・地域貢献	— 4	地域連携・地域貢献	— 5	地域連携・地域貢献	— 6		
和食文化研究	— 7	国際交流	— 7				
各学部・研究科の取り組み	文学部	— 8	公共政策学部	— 8	生命環境科学研究科	— 9	
受賞情報	— 10	受賞情報	— 11	ニューフェース	— 11	退職教員からのメッセージ	— 12

特集

京都学・歴彩館が北山にオープン

■新たな文化・学習交流拠点の誕生

京都に関する資料の総合的な収集、保存、公開を50年以上にわたり担ってきた京都府立総合資料館が、新たに、京都の歴史・文化に関する研究支援や学習・交流の機能を加え、京都北山の新たな文化・学習交流拠点「京都府立京都学・歴彩館」として生まれ変わり、平成28年12月23日に一部オープンしました。平成29年春には、京都府立大学附属図書館や歴彩館の閲覧室等の施設が完成してグランドオープンする予定です。



京都学・歴彩館の名称には、京都は千年にわたり、内外の文化を取り入れ、それを日本文化へと昇華させてきた、歴史のあやなす文化創生の地であり、資料を収集・研究する場としてだけでなく、こうした京都の文化の本質を国際的視点も含めて研究することによって、次の京都につなげていく施設としたい、という思いが込められています。

■京都学・歴彩館の主な機能等

京都学・歴彩館では、京都府立大学をはじめ京都府内外の大学・研究機関と連携して、京都のさまざまな文化資源の研究プロジェクトを展開し、

これらを広く発信していきます。また、国際的な視野で幅広い研究交流のネットワークを築き、若い研究者を招聘し、京都で、その研究を深化するための支援を行っていきます。



大ホール

とりわけ、京都学については、

これまで積み上げてきた総合資料館の資料・研究の蓄積と京都府立大学の教育・研究の実績を融合して様々な取組を幅広く展開することで、京都学の研究の深化や情報発信などを推進していきます。

現在は1階の交流フロアの一部が開館しています。京都の文化に関する様々なセミナーやシンポジウム等の会場となる大ホール(484席)や小ホール(100席)などのほか、京都府が所蔵する美術工芸品や文書資料の展示室、京都の歴史や文化等を学び、研究する方の交流スペースとなる京都学ラウンジ等が配置されています。これらの施設は、京都府立大学の学生や研究者の教育・研究の場としても活用していきます。

■学生・研究者だけでなく、府民の皆様にも利用できる施設として

平成29年春オープン予定の2階には、京都府立大学・京都府立医科大学附属図書館や歴彩館の閲覧フロアを設け、これまで総合資料館が収集・所蔵してきた京都に関する図書資料、古文書、古典籍、行政文書、写真資料など約74万冊(点)に加え、京都府立大学・府立医科大学附属図書館の所蔵図書約20万冊・学術雑誌約2,000種の資料や図書等を備えることとなり、これらの資料等はどなたでもご覧いただけます。また、京都府立大学附属図書館は、これまで閉館していた土曜日・日曜日を開館するなど教育・研究環境の充実を図るとともに、府民の皆様にも新たに図書の貸し出しを行います。

今後、3～4階には京都府立大学文学部の研究室、実習室、演習室等の施設が整備され、秋頃には新たな研究や教育活動拠点として研究者や学生が集う場となる予定です。

京都の文化の普遍的価値を探る京都学研究の推進拠点として、また、人々が集い、楽しく学び交流する中から新たな文化価値を創造する施設として、さらに、地域や府民に開かれた大学として多くの皆さまにご利用いただけることとなります。



閲覧フロア

「京都を学ぶセミナー【洛北編】」第1回の開催

府立京都学・歴彩館プレ事業として京都府立大学文学部の教員も参加した「洛北の文化資源」研究プロジェクトの成果を、分かりやすく解説する「京都を学ぶセミナー【洛北編】」第1回が開催されました。

- ◆開催日 平成29年1月27日(金)
- ◆会場 京都府立京都学・歴彩館大ホール、京都学ラウンジ
- ◆内容 講演「よみがえる足もとの歴史—植物園北遺跡にみる賀茂の古代—」
京都府立大学文学部 教授 菱田 哲郎
交流会 京都学ラウンジで参加希望者と菱田教授や金田歴彩館長を交えて意見交換を行った後、館内の植物園北遺跡遺構を歩くオプションツアーを実施
- ◆参加者 講演140名、交流会40名



当日は、考古学ファンをはじめ近隣住民などの参加者が、講師の話に熱心に耳を傾けておられ、「道、川が発掘をとおして、重層的に浮かび上がり、想像をかきたて面白い話でした」「改めてこの(洛北)地域を見直すことができた」等好評を博し、盛会のうちに終了しました。

国際京都学シンポジウムを開催

2月18日(土)に京都御所西隣の金剛能楽堂で、文学部主催による国際京都学シンポジウム「恋のしぐさのいろいろ 能楽と崑曲～日中伝統演劇の比較研究～」を開催しました。これはともに世界無形文化遺産に登録されている日本の能楽と中国の崑曲をとりあげて、双方の実演を鑑賞しながら、それらの共通点と相違点について考えるというシンポジウムです。

能楽と崑曲の双方の演者がそれぞれの演じ方について詳しく解説しながら、研究者とともに具体的に分析しました。崑曲研究家の前田尚香氏が名曲『牡丹亭』の一節「遊園」を舞い、観世流の山崎芙紗子氏が『班女』や『松風』の一節を仕舞の形で舞って、それぞれ恋人への切な

い思いを表現するしぐさの数々を見比べました。会場いっぱいの参加者の方々は、一つ一つのしぐさの説明に深くうなずかれ、大変満足されたことが窺えました。今回で4回目となったこの演劇シンポジウムを今後も発展させる計画です。

(文学部日本・中国文学科 山崎福之 教授)



地域連携・地域貢献

精華キャンパスにおける学外連携の取組

本学精華キャンパスは、けいはんな学研都市エリアの精華町に位置しています。

農学生命科学科 野菜花卉園芸学、細胞工学、資源植物学、遺伝子工学の4つの研究室と生命環境学部附属農場が設置され、自然豊かな環境の中で教育研究が行われています。また、企業との共同研究フィールドとなる産学公連携研究拠点施設も有しており、産学公連携による新産業の創出や企業集積に寄与するとともに、市民公開講座、子どもの科学実験教室、農業技術研修等々、様々な地域貢献事業や町づくりに積極的に取り組み、けいはんな学研都市における知の拠点としての役割を果たしています。

【溶いも地域産品化】

附属農場で選別・育成してきたヤマノイモ科植物のダイショを平成25年度から「溶いも～ LAKU-IMO～」という名で、精華町、JAやましろ精華町花卉部会、地元栽培農家の皆さんとともに、地域特産品ブランドとして立ち上げ地域活性化を図っています。

精華町、長岡京市や宇治田原町内の保育所や小学校あるいは市役所に苗を配布して、グリーンカーテンとして栽培し、府民の皆さんへPRする一方、精華町最大のイベント「精華祭り」での



販売やアンケート調査を行うなど、溶いものブランド化へ向けたマーケティング戦略のためのデータ収集・分析を行うことで地域産品化の支援に取り組んでいます。

また、溶いもの新たな利用法として焼酎の生産を試み、鹿児島大学焼酎・発酵学教育センターや近隣府県の酒造業者の協力を得て、近く製品化が実現する予定です。

地域課題に関係者が向き合った上で目標を共有し、それぞれの知恵を持ち寄って課題解決に取り組む地域産品化事業の好例としてこの事業が発展し、また、本学の様々な研究シーズとともに、更に地域に事業の成果が還元されていくことを期待しています。

【子どもの科学教育支援ネットワーク“K-Scan”との連携】

精華キャンパスでは、教職員が一丸となって、K-Scan・けいはんな科学コミュニケーション推進ネットワーク(※)との連携により、未来を担う子どもたちに「科学の学び」の機会を提供する取り組みを行っています。

様々な大学・関係団体と協力し、今年1月には「けいは

んなオープンイノベーションセンター」で、2月には「けいはんなプラザ」で、子ども向け科学実験講座を開催。合わせて1千数百名を越える親子が来場されました。



キャンパスが位置するけいはんな学研都市の更なる発展を願っています。

※K-Scanは精華町の「科学のまちの子どもたちプロジェクト」の継承・推進のため設置された任意団体

【精華町若手職員との連携】

精華キャンパスでは、精華町役場の若手職員が庁内横断で取り組んでいる「せいか365」プロジェクト事業に対して、積極的に支援をしています。町民の皆さん一人ひとりが主体的に健康づくりに参加できる仕組みを作ろうというのがプロジェクトの目的です。附属農場の技術職員が野菜の栽培指導を行うとともに、町内メインストリートの環境整備事業では花壇づくりをサポートしています。

また、プロジェクトへの理解を広める取り組みとして、「野菜と健康」をテーマとした「ミニ講座」を、9月と2月に開講しました。取り組みに賛同いただいた、地元の障害者就労支援カフェ「こころく」を会場に、両日も満席でした。参加者からも、継続的な開催を求める声が多く、けいはんな学研都市における新たな町づくりにも貢献しているところです。



その他、関西文化学術研究都市の各研究機関や大学との連携による市民向け連続講座「7大学市民公開講座」の開催や、地元女性団体の要請による「ダチョウ研究」に関するミニ講座の開催等々、様々な地域連携・地域貢献の取り組みを行っています。

近年、地域や企業との連携が深まる程に、大学の果たす役割に対しては更なる期待の高まりを感じます。精華キャンパスでは、様々な要請に対し、「大学として何が出来るのか？」を教員、学生、技術、事務職員が一体となって、知恵とアイデアを出し合いながら、地域に根差した取り組みを行ってきました。地域に愛され、大切に思っただけの大学となることを願って、今後も様々な要請に応えていきます。

■京都市中央卸売市場と包括連携協定を締結

「京の食文化及び食育の拠点」として季節や旬を重んじる京都の食文化の情報発信や食育に積極的に取り組む京都市中央卸売市場第一市場と、生命環境学部食保健学科、京都和食文化研究センターなど、食や食文化に関する研究室を設置し、知の拠点として常に新しい教育・研究領域の開拓を目指す府立大学とが、一体となって食に関する様々な取組を進めていくため、包括連携協定を締結しました。

平成28年10月に下京区の中央卸売市場で、築山学長、小沢地域連携センター長の出席のもと、協定の締結式が行われました。

平成28年度は、中央卸売市場のイベントで、京都和食文化研究センターが「めざせ！お箸の達人」（おはしの正しい持ち方・使い方・知識を、ゲームを通じて楽しみながら習得）を実施したり、生命環境学部食保健学科食事学研究室が、パンフレット「旬だより（果実編）」の制作監修に協力したりしました。

また、同じく食事学研究室の学生たちが、早朝、まだ暗いうちから中央卸売市場を訪問。水産と青果のセリ売り

の現場や、大きな魚、珍しい野菜もさることながら、セリの音声・映像の全てを電子的に記録している記録室など、通常は入れない場所も見学させていただきました。

今後も、本学の多様な研究や学生の若い力、面白い発想、角度の違う知恵等をベースに、人的・知的資源の交流、活用を図ることで、大学の教育活動の活性化、市場の活性化、地域の活性化及び将来の人材育成に寄与し、さらには市場の取扱量の増加につなげる取り組みを進めていきます。



「めざせ！お箸の達人」



パンフレット
「旬だより（果実編）」

■地域貢献型特別研究 (ACTR) 成果報告会を開催しました

京都府内の地域振興や産業・文化の発展等への貢献を目的に、平成16年度から、府内各地で京都府立大学の教員が自治体、NPO、経済団体などと連携して、地域貢献型特別研究 (ACTR Academic Contribution To Region) に取り組んでいます。

平成28年度も、研究テーマ (地域課題) を一般公募したところ、市町村等から50件の提案がありました。これに対する研究計画を学内教員から募集。内容により提案を統合し、32件の提案に対応する21件の研究を実施しました。

そのうち複数の研究の成果をまとめた報告会を、宮津市にあるみやづ歴史の館で、2月18日・19日の2日間にわたって開催。宮津市教育委員会、舞鶴市、京丹後市教育委員会、宮津市商工会議所及び府立丹後郷土資料館等とともに、「海からみる丹後の歴史・文化」及び「宮津新浜の芸能文化と社会・人・まち」についての報告とシンポジウムを行いました。

また、3月15日には本学に隣接して新たにオープンした京都府立京都学・歴史館で生命環境科学研究科のACTRの報告会を開催しました。

みやづ歴史の館	丹後の海と古代祭祀	文学部	准教授 向井佑介
	幕末維新の動乱と宮津三上家の廻船業 —会津藩・長州奇兵隊との関係を中心に—		准教授 藤本仁文
	宮津の「茶屋町」—東新地、万年新地、新浜 記録映像「[Sassa yo Yassa] を探して」上映会		講師 松田法子
京都学・歴史館	DNAからみた宇治茶の成り立ち	生命環境科学研究科	准教授 久保中央
	覆いをかけて栽培した茶のストレスを軽減させる栽培法の検討		講師 森田重人
	住まいの環境と健康 —熱中症発症の現状とその特徴—		教授 松原斎樹
	夏期の住まいと住まい方の工夫 —有効な熱中症対策の研究結果から—		特任講師 柴田祥江
	木を使い、樹を育てる —早生樹研究の最近の進歩—		教授 宮藤久士
	木質ペレット燃却灰の有効利用方法に関する研究		助教 糟谷信彦

■京都市立大学地域連携センター学生部会かごらより ―活動紹介―

昨年春に、京都府公立大学法人理事長賞を受賞して以降も、地道に日々の活動を続けています。



主な活動である「かごらカフェ」は、地域の方々と京都市立大学の学生との交流の場です。さまざまなクラブやサークルの協力のもと、毎月1回カフェを実施

しています。28年度はこれまでで13回開催し、4月の初めには植物園でのお花見、11月には流木祭での開催等、様々な企画を実施し、3月末には北山地域のお祭りである北山おいフェスティバルでかごらカフェを開催、おなじみのカフェでゆったりしていただいたり、今までカフェに来たことのない方とも交流することが出来ました。

10月には、「KYOのあけぼのフェスティバル2016」のイベント「男女共同参画推進のための世代間

交流ワールドカフェ」に参加しました。男女共同参画の現状について学んだあと、「職業生活と家庭生活の両立」をテーマにグループに分かれ気づきや意見を共有しました。

11月には「あすのKyoto・地域創生フェスタin京都市立植物園」で、本学の地域貢献活動PRのお手伝いをしました。「かごら」の活動紹介をはじめ、地域貢献型研究(ACTR)の研究成果についての説明や、附属農場の農産物の販売などを行いました。いろいろなNPOや青少年団体の取り組みを知るよい機会にもなりました。

今後も、かごらカフェ事業を通じて知り合った社会福祉協議会の方や京都府職員の方など、様々な方々の助言を頂きながら、活動を広げられるよう頑張ります。



あすのKyoto・地域創生フェスタ
in京都市立植物園にて
小沢地域連携センター長と

■地域創生COC+教育プログラム

黒谷和紙づくりを体験 地域創生フィールド演習“トライアル版”

平成28年度からスタートした「地域創生COC+教育プログラム」では、京都市中・北部地域の自然や文化を活かして様々な生業を営んでおられる「地(知)の案内人」を訪ねて学ぶ「地域創生フィールド演習」を平成29年度から実施すること



黒谷和紙体験(綾部市)

としていますが、その“トライアル版”として平成28年12月23日に綾部市内で模擬演習を実施しました。

「地(知)の案内人」である黒谷和紙協同組合理事長の林伸次氏を講師に、黒谷和紙の原料となる楮(こうぞ)の刈取り作業や手すき和紙の工程の見学、手すき和紙体験などを行いました。参加した学生たちは和紙の原材料となる楮を見るのも初めてで、感想をきいたところ、「楮作りの担い手がいなくなり、現在は保存会の人たちのボランティアによって行われていることを知った。紙漉きに至るまでの原材料作りの大変さが良くわかり貴重な体験ができた。来年も演習としてぜひ来たい」と話してくれました。

「京都の地域創生」ではテレビ会議を使った講義を実施

「地域創生COC+教育プログラム」の1回生を対象とした講義「京都の地域創生」では、第6回から第12回の7回にわたり、テレビ会議システムを使って地域と講義室とを中継でつなぎました。南丹市美山町、福知山市三和町、宮津市、伊根町、舞鶴市、京丹後市の各地域の「地(知)の案内人」の皆さんから講義室の学生に、自己紹介や地域創生フィールド演習の企画内容などを説明していただきました。学生からは日替わりカフェや漁業体験など演習内容についての質問があり、「地(知)の案内人」の皆さんからは、地域づくりにかける思いや学生への期待などが語られました。学生のレポートでは、「テレビ会議では地域の方のお話を直接聞けて良かった」、「地域の人たちの元気に驚いた」といった感想が多く寄せられました。



テレビ会議システムを使った講義



宮津市上世屋の
「地(知)の案内人」の皆さん

和食文化研究

和食文化教育・研究の学外連携について

2016年10月号でも簡単にご紹介をしましたが、和食文化研究センターでは学外の関係機関との連携を積極的に進めています。

大学コンソーシアム京都が主催する「kyoto study program」(京都の大学へ留学を検討中の外国人学生を対象に京都の奥深い魅力を体験してもらう独自プログラム)では、上田特任教授が中心となり、昨年8月、禅宗の影響により独自に発展を遂げた精進料理に関する講義と実食体験を企画・提供しましたが、これが大好評。本年1月には、オーストラリアやUAE等世界7ヶ国の学生を対象に追加のプログラムを実施しました。肉食がタブーであったため、蒟蒻や豆腐を使って肉に似せた献立があることに学生さん達はびっくり。一方で、高野豆腐には、「スポンジみたい」「母国にない食感」と戸惑いの声も。まさに食は文化。異文化との接触でさらに日本の生活文化全般への関心が高まったようでした。

また、このプログラムには、京都文化交流コンベンションビューローが養成する「京都市ビジターズホスト」(京都市認

定通訳ガイド)の研修生に実習の一環として試行的に参加いただきました。急増する外国人観光客の和食に関する関心の高まりに対応するため、外国語に加えて、食、文化財、伝統産業などの分野で京都観光の奥深い知識を修得いただくとするものです。実習プログラムとしての有効性を評価いただき、29年度からは公式プログラムとして取り入れていただくことになりました。

このように、和食文化研究センターでは、学外との連携や国際交流に力を入れています。本年2月28日、3月1日には、産官学連携で和食文化による地域創生と国際交流のあり方を議論するキックオフシンポジウムも開催しました。

今後も、和食文化研究センターの取組にご注目をお願いします。



国際交流

京(みやこ)グローバル大学に採択されました

昨年10月、本学は、京都市が今年度より新規事業として実施する「京(みやこ)グローバル大学」促進事業の採択大学として認定されました。この事業は、京都市内の大学に対し、留学生誘致をはじめ、日本人学生の交換留学にもつながらる海外大学との提携などの取組に対して京都市が支援するものです。

本年2月・3月には、オーストラリアのマッコリー大学への短期留学プログラムを実施し、英語研修だけでなく、現地や京都の世界遺産などを通じて文化を学ぶ体験学習などを行いました。

今後は、平成31年度までのおよそ4年間、今回採択された下記事業をはじめ国際化推進に向けた取組を積極的に進めることにより、京都をはじめ国内外の産業界などで活躍できるグローバルな視野を持った人材を育成し、京都の地域社会と国際社会の発展などに貢献していきます。



(1) 留学生誘致事業

- ①海外協定先との交換留学プログラムの開発・実施
カナダ・ラヴァル大学との中・長期交換留学プログラム

(2) 留学生支援体制の構築事業

- ①生活・キャリア育成支援アドバイザーの配置、留学生就業マッチング調査
留学生の生活・就職等の情報収集や相談などを行うための相談員の配置など

(3) 日本人学生の留学促進事業

- ①オーストラリア・マッコリー大学派遣プログラムの開発・実施
全学対象の短期留学プログラム(英語研修+文化体験・京都文化発信プログラム)
- ②中国・西安外国語大学派遣プログラムの開発・実施
全学対象の短期留学プログラム(中国語研修+文化体験・京都文化発信プログラム)

国立華僑大学(中国)と学術交流協定を締結

本学は、中国の国立華僑大学と2016年10月12日、学術交流に関する協定を締結しました。

国立華僑大学は、1960年に福建省泉州市で創立された中国国务院華僑弁公室直属の大学です。今回、協定を締結した国立華僑大学の建築学院は1983年に新設され、建築学、

都市計画学、ランドスケープ学の3学科で構成されており、本学の環境デザイン学科の構成と類似した学部となっています。

国立華僑大学は国際交流に積極的であり、今回の協定締結により、より活発な交流が進むことが期待されます。

文学部

学問の歴史とグリム兄弟

欧米言語文化学科 横道 誠 講師

古くから、地球上のさまざまな場所でさまざまな知的営為が紡がれてきました。この500年ほどは欧米発のさまざまな発想が全世界的な規模で影響力を持つようになり、知的営為もあり方も欧米型が当然視されるようになりました。私たちが働く大学という機関も、大学のなかで行われる学問分野の枠組みも、それぞれの学問の遂行方法も、欧米型です。古くから、世界のあちこちで多様な「学問」が存在し、高度な水準にありました。しかし、江戸時代の日本、清朝、植民地化される前の南アジアやイスラム世界の学問は、欧米との「抗争」に苦戦しました。これらのことを知り、考えるにつれて、私は、欧米ではない日本で生まれ育ち、また日本でいまも生きる者として、「欧米の学問の歴史」に興味を抱くようになりました。

私の研究内容と関係が深いドイツは、19世紀から20世紀の初めにかけて、学問の発展が著しく進みました。世界で最も先を行く「学問の国」と見なされ、日本からも、森鷗外を含め、多くの偉人がドイツで学びました。私は若いころ、ド

イツでの社会科学や自然科学の発展がドイツ文学の表現に与えた影響について研究していたのですが、次第に自分と関係が深い文学部系の学問(いわゆる人文学)と文学表現の関係に関心が移りました。数年前からは、「学者としてのグリム兄弟」というテーマに取り組んでいます。ドイツの伝承文学を収集した『グリム童話』の書き手として知られているグリム兄弟は、本来は法制史の研究者でした。彼らは、そこから比較言語学、比較宗教学、民俗学、伝承文学研究などにも手を広げていきました。『グリム童話』は、彼らの研究活動の成果の一環にすぎません(大きな成果ではあるとはいえ)。ユーロが導入されるまで、ドイツの最高額紙幣の肖像はグリム兄弟でしたが、このことはドイツという国にとっての彼らの存在感の大きさをよく示しています(日本に置き換えるなら、福沢諭吉や聖徳太子ということでしょうか)。彼らの研究を理解していくと、日本の学問世界に与えた影響も見えてきて、刺激的です。



公共政策学部

公民館の歴史をさぐる

福祉社会学科 田所 祐史 准教授

「平和の春にあたらしく 郷土を興すよるこびも 公民館のつどいから とけあう心なごやかに 自由の朝をたたえよう」

公民館は、図書館や博物館などと並ぶ社会教育機関として、地域で人々が学ぶ機会や場を提供・保障しています。その誕生は1946年。疲弊した地域の振興の一原動力が公民館でした。

住民・職員、事業・活動、施設・設備によって成り立つ公民館には、70年の歴史があります。昨年、日本公民館学会による70周年を記念した集会在、京都府立大学を会場に開かれました。

冒頭に掲げたのは、「公民館の歌(自由の朝)」という歌の1番の歌詞です。子ども、青年、女性、成人、高齢者など、さまざまな人々が、公民館につどって、出会い、ふれあい、学びあう、地域に根ざした社会教育活動を行ってきました。現代社会の課題を反映して、最近では地域づくり、地域福祉、青少年を地域で育む実践などもみられます。歌詞の2番は「文化の泉くみとろう」と結ばれていますが、地域社会でのこうした活動も、私たちが創造し育む文化だといえましょう。

これらの地域の社会教育機関はどのようにして生まれ、展開してきたか、営造物としての施設面や福祉的な機能面等に着目して、歴史研究に取り組んでいます。公民館の源流をたどる研究や、草創期の公民館の施設形態調査などを積み重ねることで、地域で社会教育を発展させる条件・環境の形成過程と特徴を明らかにしたいと考えています。

また、史料を通じて歴史に向き合うだけでなく、現代の実践現場——公民館をはじめとする全国各地の社会教育機関と職員を訪ねて、研究と実践を結ぶ姿勢を大事にしたいです。

社会教育を取り巻く状況は厳しさを増していますが、都市においても、農山漁村においても、社会教育を通じて相互に高めあう住民、実践に地道に取り組む職員、地域で愛されている施設に出会えたときは嬉しいものです。



熊本で出会った廃バスを利用した町内公民館

生命環境科学研究科

ゾウが護る森の不思議

応用生命科学専攻 動物機能学研究室
牛田 一成 教授

野生動物の腸内細菌研究のために、アフリカに通っている。朝早く森のキャンプを出発し、排泄したての糞を探して息を潜めながら歩き回る。ガボン共和国ムカラバの森には、ゴリラやチンパンジーの他、多様なサル類、ゾウ、カバ、シカやレイヨウ、カワイノシシ、ヒョウなどが高密度で生息する。そこは、多くの謎と不思議の詰まった森だった。8月のある朝、キャンプ地を出発しモンドゥ山(モンドウ山)の裏側に回り込んだ。ここ数日間、そこでは、いろいろな動物に出会い新しい糞を拾うことができていた。いつものように、古い林道から森の獣道に入る。いきなり頭上から若いオスゴリラに威嚇されてしまう。右手の丘の上から、チンパンジーも警戒音を発する。なんだか昨日までと様子が違う。ふと顔を戻すと、50mほど先にねずみ色の巨大な物体が見え隠れしている。「ヤバイ、ゾウだ」。案内人のザンバットは、刀で爪を削って、風向きをみる。「先生、こっちが風下だから、脇の小川を伝って、ゾウを回りこもう」という。そろそろと右手を流れる小

川に降りて、息を殺して歩いて行くと、ザンバットがいきなり小川にはまる。ドボンと大きな音。「サバ?」と聞く間もなく、ザンバットが「逃げる!」と叫ぶ。振りかえ



撮影:湯本 貴和

と、目の前に怒ったゾウがいた。耳を一杯に広げ、鼻を頭上に振り上げ、「パオー」と吠える。ゾウの声で背骨がびりびりと振動する。我に返り、河原を走り、目の前の急斜面を攀登る。15mほど攀って太い木にしがみつくと、足下に若い雌ゾウがいた。走ってきた方をみると、子ゾウのまわりに数頭のゾウがいて、むしゃむしゃと木の葉を食べている。しばらく我慢しているとゾウたちは立ち去っていった。再び探索を始めたのだが、昨日まであんなにたくさんいた動物がかき消すようにいなくなっていた。その日から毎日20 km以上も森の中を這いずり回るのだが、ついに誰とも出会うことがなかった。あのゾウのお叫びは、森の神の怒りだったのかもしれない。キャンプを撤収する日、ようやくアカカワイノシシの群れが道まで出てきて見送ってくれた。

iF 賞審査会に参加して

環境科学専攻インテリアプロダクトデザイン学研究室
塚本 カナエ 准教授

iF賞は、ドイツの国際的デザインアワードです。これに今年は招待され、審査員として参加して参りました。

ドイツのハンブルグという町で行われたのですが2.5日間、ホテルと審査会場をチャーターバスで移送され、自由はほぼありません。会場は港にあるWAREHOUSEで、まずは審査員が顔合わせをしてから審査上の注意点を聞きます。翌日から3人ずつに審査カテゴリー(ex.: 輸送機器、照明、家具、日用品…等)に別れ、審査を開始致します。かなり議論をします。皆プロですから個人的好みで意見を述べるわけではありません。客観的にいいか悪いかをジャッジします。その基準は明文化されているわけではないのですが、プロのデザイナーが互いに共有できる客観性が存在します。それはクライアントさんにプレゼンをする際に頂く質問の積み重ねがあり、構築された観点であると思います。

判定の際に興味深かった点は洋の東西を問わず、デザイン的な観点から「これはこうだ」と主張すると、それを相手は賛成でなくとも理解してくれることです。プライベート

な話は難しそうな方とでも、デザインの観点からの話であれば理解しあえるということが非常に面白いと思えました。この点からも何らかのスタンダードが存在することは明確です。また、一通りチームで与えられたカテゴリーの審査をした後に、各自自分のカテゴリー以外の判定に対し異論があれば旗を立てに行きます。自分のカテゴリーに旗が立つとディフェンスしなければなりません。その際は前方のスクリーンの前に立ち、判定の根拠を話し、反対した人はその理由を話します。そうして最後はどちらの意見に賛成か多数決を取り、判定の最終決定をします。ドイツ人はそれが大好きなのだそうです。

バウハウスの思想が根底に深く根差しているデザイナーさんたちが幹部で、その思想の元に判定基準が定められていることを肌身で感じた会でした。



受賞情報

文学部／文学研究科

博士前期課程1回生 豊田 祥子

博士前期課程2回生 宮下 遙

歴史学科 4回生 近藤 史昭

文化的景観研究集会「ベストポスター賞」受賞

第8回文化的景観研究集会において、「照間知ってるま!? ～ビーグの見える風景～」の発表により、「ベストポスター賞」を受賞しました。

公共政策学部

公共政策学科 窪田ゼミ

京都から発信する政策研究交流大会

「大学コンソーシアム京都理事長賞」受賞

第12回京都から発信する政策研究交流大会(主催:(公財)大学コンソーシアム京都)において、窪田ゼミ(2回生の奥村芽衣さん、伊藤壽那さん、大西優香さん、岡村賢聖さん、岡村菜央さん、岸田黎さん、境大地さん、高井健太さん、多田純也さん、土井梨那子さん、日高百合江さん、守本有希さん)が「京都市政策評価制度の結果活用の実態調査を踏まえた改善提言」の発表により、「大学コンソーシアム京都理事長賞」を受賞しました。

生命環境科学研究科

応用生命科学専攻／生命環境学部

木戸 康博 教授 (栄養化学研究室)

日本栄養改善学会「功労賞」受賞

日本栄養改善学会の理事長として、学会の発展に多大な貢献をしたことにより、「功労賞」を受賞しました。

中尾 淳 准教授 (土壌化学研究室)

公益財団法人農学会・平成28年度(第15回)

「日本農学進歩賞」受賞

公益財団法人農学会において、「放射性セシウムの土壌鉱物への固定に関する研究」により、日本農学進歩賞を受賞しました。

博士前期課程1回生 吉岡 快さん (機能分子合成化学研究室)

有機合成若手セミナー「ポスター賞」受賞

第36回有機合成若手セミナーにおいて、「合成経路を模倣した Juglomycin 類の網羅的合成」の発表により、「ポスター賞」を受賞しました。

博士前期課程2回生 堀田 あゆみ (細胞高分子化学研究室)

博士前期課程1回生 居田 萌 (//)

日本生物高分子学会2016年度大会「優秀発表賞」受賞

日本生物高分子学会2016年度大会において、堀田あゆみさんが「大腸菌 Mg²⁺要求性変異株を用いた、シロイヌナズナ由来CorA family タンパク質 AtMRS2-1のMg²⁺輸送能とMg²⁺輸送に対するAl³⁺の効果の解析」の発表により、居田萌さんが「イネ由来Mg²⁺輸送タンパク質OsMRS2-1とOsMRS2-6における大腸菌Mg²⁺要求性変異株の相補とAl³⁺による生育阻害効果の違い」の発表により、「優秀発表賞」を受賞しました。

博士後期課程2回生 畑澤 幸乃 (分子栄養学研究室)

日本アミノ酸学会第10回学術大会「優秀ポスター賞」受賞

日本アミノ酸学会第10回学術大会において、「骨格筋においてPGC1 α はアラニン代謝を調節する」の発表により、「優秀ポスター賞」を受賞しました。

博士前期課程1回生 梶河 直起 (植物病理学研究室)

糸状菌分子生物学コンファレンス

「学生優秀ポスター発表賞」受賞

第16回糸状菌分子生物学コンファレンスにおいて、「ウリ類炭疽病菌における細胞周期制御因子CoTem1の推定相互作用因子CoPpt1は病原性に関与する」の発表により、「学生優秀ポスター発表賞」を受賞しました。

博士前期課程1回生 川原 佑貴 (機能分子設計化学研究室)

4大学連携研究フォーラム「最優秀賞」、

CSJ化学フェスタ「優秀ポスター発表賞」受賞

第6回4大学連携研究フォーラムにおいて「病原性粒子1個の検出に向けた、表面プラズモン局所加熱によるDNA伸長を利用した表面プラズモン共鳴センサーの高感度化」の発表により学生部門「最優秀賞」、第6回CSJ化学フェスタにおいて「病原性粒子1個の検出に向けた、DNA伸長による表面プラズモン共鳴センサーの高感度化」の発表により「優秀ポスター発表賞」(無機・分析科学部門)を受賞しました。

博士前期課程1回生 山上 紅里 (機能分子合成化学研究室)

// 正田 孝明 (//)

有機 π 電子系学会第10回有機 π 電子系シンポジウム「ポスター賞」受賞有機 π 電子系学会第10回有機 π 電子系シンポジウムにおいて、山上紅里さんが「V字型キサントン色素の開発」の発表により、正田孝明さんが「ジナフトフラン骨格を有する新奇[1,2]CPP誘導体の合成と物性」の発表により、「ポスター賞」を受賞しました。

博士前期課程1回生 成相 桂 (応用昆虫学研究室)

日本昆虫学会近畿支部「若手発表賞」受賞

日本昆虫学会近畿支部2016年度大会において、「クルマヒソガ(鱗翅目: ホソガ科)で迫る近親交配の回避機構」の発表により、「若手発表賞」を受賞しました。

博士後期課程3回生 深田 史美 (植物病理学研究室)

日本学術振興会「育志賞」受賞

「植物病原糸状菌における細胞周期と植物感染制御機構に関する研究」により、第7回(平成28年度)日本学術振興会育志賞を受賞しました。

博士前期課程1回生 富田 真悠 (土壌化学研究室)

日本土壌肥科学会関西支部講演会「優秀発表賞」受賞

2016年度日本土壌肥科学会関西支部講演会において、「蛇紋岩上に発達した土壌における有機物・水酸化Alポリマー除去に伴う放射性セシウム吸着能の変化とその規定要因の解析」の発表により、「優秀発表賞」を受賞しました。

博士前期課程1回生 杉山 紘基 (栄養化学研究室)

日本病態栄養学会「若手優秀独創研究賞」受賞

第20回日本病態栄養学会年次学術集会において、「非アルコール性脂肪性肝疾患患者における病態進行と食行動心理の関係」の発表により、「若手優秀独創研究賞」を受賞しました。

食保健学科4回生 朝見 直子

日本調理科学会近畿支部研究発表会

「若手優秀発表賞」受賞

日本調理科学会近畿支部第42回研究発表会において、「エビイモの親芋の調理科学的特性」の発表により、「若手優秀発表賞」を受賞しました。

生命環境科学研究科

環境科学専攻／生命環境学部

河西 立雄 准教授 (建築意匠学研究室)

総合的なデザインの推奨制度「グッドデザイン賞」受賞

総合的なデザインの推奨制度(主催:公財)日本デザイン振興会)において、「住宅[音とサクラの家]」により、「グッドデザイン賞」を受賞しました。

博士後期課程2回生 濱田 梓 (ランドスケープ学研究室)

日本緑化工学会「研究奨励賞」受賞

第47回日本緑化工学会大会において、「京都市近郊区における緑地形態・土地利用と鳥類生息との関連性に関する研究」により、「研究奨励賞」を受賞しました。

博士前期課程2回生 沖 貴大 (生物材料物性学研究室)

材料WEEK材料シンポジウム若手学生研究発表会

「優秀講演賞 ベストプレゼンテーション賞」受賞

第2回材料WEEK材料シンポジウム若手研究発表会において、「連続加振による木材の振動特性の変化-乾燥履歴の影響について-」の発表により、「優秀講演賞ベストプレゼンテーション賞」を受賞しました。

博士後期課程3回生 桐生 智明 (生物材料物性学研究室)

日本木材学会中部支部大会「優秀発表賞」受賞

平成28年度日本木材学会中部支部大会において、「竹の流動成形によるスピーカー振動板の実用化に向けた研究-林地における竹素材の選定方法と樹脂含浸性向上のための前処理方法の検討-」の発表により、「優秀発表賞」を受賞しました。

博士前期課程1回生 乃美 安紀穂 (建築意匠学研究室)

環境デザイン学科 4回生 田中 俊之 (")

// 米澤 政人 (")

学生住宅デザインコンテスト「HINOKIYA賞」受賞

第2回学生住宅デザインコンテスト(主催:毎日新聞社)において、「屋根裏空間の庭化による住宅設計提案「都市の中のヤネのウラ」」により、「HINOKIYA賞」を受賞しました。

環境デザイン学科 4回生 田中 俊之 (建築意匠学研究室)

// 米澤 政人 (")

// 2回生 松本 哲弥

木の家設計グランプリ 未来へ住みつなぐ木の家

~次世代への暮らし方をデザインする、

住みつなぐ新築住宅の提案~

「ビルダー賞」「審査委員賞(荻野寿也賞)」受賞

2016年 木の家設計グランプリ 未来へ住みつなぐ木の家~次世代への暮らし方をデザインする、住みつなぐ新築住宅の提案~(主催:木の家専門店 谷口工務店)において、田中俊之さんが「木造立体格子による無柱空間の住宅設計提案「あの頃の思い出のままに」」により「ビルダー賞」、米澤政人さん、松本哲弥さんが「4つのコア・中庭・緑化屋根の構成による住宅設計提案「木陰と暮らす家」」により「審査委員賞(荻野寿也賞)」を受賞しました。

博士前期課程2回生 柴崎 大樹 (森林植生学研究室)

日本植生史学会「優秀発表賞」受賞

日本植生史学会第30回大会において、「比良山系蓬萊山稜線部における植生変遷とササ草原の成立過程-小女郎ヶ池堆積物の古生態学的分析に基づく検討-」の発表により、「優秀発表賞」を受賞しました。



ニューフェース

**生命環境科学研究科
応用生命科学専攻**

助教 佐藤 壮一郎

主な研究領域
植物分子生物学・ゲノム科学



ゲノムには様々な遺伝子や、それらを制御する多くの情報が書き込まれており、生物にとって設計図の役割を果たしています。また生物は、この設計図を巧みに書き換えることで、多様な進化を遂げてきました。私は植物を用いて、ゲノムの変化に関わる様々な分子メカニズムについて研究を行っています。今後は、このゲノム科学という観点から、生物の進化や遺伝子操作技術の改良など、より幅広い課題にチャレンジしていきたいと考えています。

退職教員からのメッセージ

英語を学び始めた頃

文学部 欧米言語文化学科 佐々木 昇二

最近英語を学び始めた中学校の頃のことをよく思い出さるようになった。二年生の時には当時のNHKラジオ第二放送の『続基礎英語』を毎日欠かさず聴き、出て来た単語は全部完全に覚えるなどがむしゅらに勉強した。遙か海の向こうに思いを馳せながら、犬養道子の『私のアメリカ』（1966年刊）を買って読んだりもした。その後、高校、大学、大学院へと進み、いつの間にか英語を教える立場になり、それから三十有余年、教

壇に立ち続けてとうとう退職の日を迎えることになりました。

この間、教員生活のほとんどを過ごさせてもらった府立大学の皆さんには迷惑をかけることばかりでしたが、この先、お世話になった方々のお顔を、もう数えきれないほどの数になった学生諸君の顔とともに、折に触れて思い出しながら、また英語の勉強を始めます。差し当たり今コネティカットにいる姪を訪ねて「初めてのアメリカ」を体験するつもりです。長い間ありがとうございました。



退職にあたって

文学部 歴史学科 榎木 謙周

本学に1992年に着任して以来四半世紀になりますが、皆様方に支えられてここまで来ることができました。この間、学生も教職員も京都の大学ということ強く意識して勉強・仕事に励んでいるさまを見てきました。私も京都で学びましたので、この点は自然と受け入れられたのですが、自身が教育と研究に従事するとなると、また意識を新

たにする必要がありました。そのなかで一つ思い出に残っておりますのは、2012年度に京都学に関するACTRの仕事させていただいたことです。狭い専門の枠を破って、他学科・他学部の先生方だけではなく学外の方々とも交流の機会を持つことができ、大変有益でした。成果公開のシンポジウムでは、陝西師範大学の先生方をお迎えすることができたのも大きな収穫でした。京都学・歴史館に文学部が移る前に退職しますが、この施設が十分に活用され、地域の研究を世界に発信する新たな拠点として充実することを願っています。

府大の皆さんへ

文学部 日本・中国文学科 岸本 恵実

2010年の着任以来、皆様には大変お世話になり、心から御礼申し上げます。私の研究室は、2号館2階の南側にありました。2号館は1962年の竣工だそうです。私は専門のキリスト教資料の研究などをしながら、代々この研究室にいらした国語学（日本語学）の先生方のご研究を思い心を引き締める一方、窓の向こうに木の葉のそよぐのを見たり、鳥の声を聞いたり、季節の移り変わりを感ずるのが楽しみ

でした。

私の居りました7年の間にも、稲盛記念会館や京都学・歴史館が建つなど、本学では様々な変化がありました。設備や制度が古いままのところも、今後手が加えられていくでしょう。しかしながら、長年かけて培われてきたこの大学の落ち着いた雰囲気は、何よりかけがえのないものと感じられ、今後多少かたちを変えても、キャンパスと学生たちに伝えられていきますようにと願っています。最後になりましたが、教職員・在学生・今年の卒業生・同窓生一人一人のお幸せをお祈り申し上げます。

ありがとうございました

文学部 歴史学科 向井 佑介

京都府立大学に赴任してちょうど5年になります。考古学の分野では、しばしば複数の大学がチームを組んでひとつの遺跡を調査することがあり、私が大学院生になってまもない15年ほど前にも、山科の山林寺院の測量調査で府大の学生たちと一緒に作業したのを記憶しています。極寒の山中で着実に測量をこなし、図面を仕上げている府大生のすぐれたチームワークに、同世代として感心したものでした。

そのころと比べると、現在は学科の体制もずいぶん異なっていますが、小さな歴史学科のなかに日本史・東洋史・西洋史・文化遺産学

の各コースがそろい、専門分野にとらわれず相互に交流しながら調査・研究を進めていくことができるという府大の長所は、いまま変わりません。私自身、府大での5年間のなかで、文献史学・考古学・歴史地理学・建築史学などさまざまな分野が集まったチームの一員として調査・研究にたずさわるなかで、他分野の研究手法や視点を体感し、多くを学ぶことができました。

ひとつ心残りなのは、初めて担任を引きうけた学年の卒業を見とどけることができないことですが、優秀なみなさんはきっと無事に卒業して立派に社会で活躍されることと信じています。学生のみなさんからは、つねに元気をもらい、さまざまな経験をさせてもらいました。どうもありがとうございました。

20年間お世話になりました

生命環境科学研究科 応用生命科学専攻 木戸 康博

1997年4月に京都府立大学人間環境学部助教授に赴任して20年になります。この度、縁あって金沢に移ることになりました。この間、たくさんの学生さん、教職員の皆様との出会いがありましたこと、私の大きな宝です。厚くお礼申し上げます。

この20年間を振り返りますと、教育・研究、管理運営、地域貢献に係る活動を通じて、私自身が成長できたと確信しています。学部・大学院の卒業生・修了生が全国のそれぞれの職場で活躍しており、会議などで

出会うことも多くなりました。確実に京都府立大学の看板を背負って地域社会に貢献しています。

日本には「栄養学」が確立されていない時代に京都府立大学に赴任し、管理栄養士養成に必要な系統的な教科書の作成、管理栄養士のモデルコアカリキュラムの提案、専門職制度のあり方、などに関わってまいりました。京都府立大学の卒業生が日本の「栄養学」を牽引しているという「夢」が「目標」に変わりつつあります。

退職するにあたり、京都府立大学が益々発展されますことを祈念いたします。長い間、ありがとうございました。



長年の間、学生の教育や研究などの発展にご尽力いただき、本当にありがとうございました。